

氏名	さーばん いるはむ SAHBAN ILHAM
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第680号
学位授与の日付	平成25年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	The Western visions of Shinto architecture (神社建築の西洋観について)
審査委員	(主査)教授 石田潤一郎 教授 中川 理 教授 小野芳朗 准教授 西田雅嗣

論文内容の要旨

本論文 *The Western visions of Shinto architecture* は、序章と第1章、第2章、第3章により構成されている。

序章では、申請者が本国フランスにて神社建築の研究を始めた動機と、国費留学生として来日して知った、日本における神社建築の語られ方が、フランスにおいて欧語文献に頼って自分が研究して来たものと大きくかけ離れている事、そしてその事が本論文執筆の動機になった事を述べた。

「神社建築に対する西洋の眼差しの歴史」と題された第1章では、西洋文化がどのように日本の神社建築を見て来たかが三つの例で検討される。ヨーロッパにおいて、一七世紀以降、日本に関して初めて体系的に記述したエンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』中の神社の記述や図版をとりあげ、西洋人が西洋人の目で、西洋人に理解可能な事のみを記したものであると指摘する。特に図版については、ケンペルが描いたものではなく、多くの間違いがあり、西洋風に描かれた部分も多く、西洋の眼差しの一方通行であるとする。明治期の代表的な見方としては、ラフカディオ・ハーンの記事を取り上げ、叙情的に描き出される神社風景に、やはり西洋の眼差しの一方通行を指摘する。神社建築は、西洋文化が考え、彼らの期待に添った異国情緒の例として描かれる様を分析する。1919年以来日本に定住した日本学者で、日本の神社建築について詳細な記述をし、精緻な分析を行った研究者ポンソンビー＝フェーンも、またその建築記述、着眼点は西洋のものであり、彼の建物としてのみ神社建築を捉えた研究は、日本ではほとんど知られていないのとは対照的に、現在でも欧米においては現役の参考文献であるという。

第2章では、定説とも言える現在の代表的な日本人の手になる神社建築論を取り上げる。福山敏男と稲垣栄三の説であるが、本論文では、この二人の日本人の考えにも西洋の影響を読み取る。構築物としての神社建築の偏重、自然的アニミズム的状态からよりモニュメンタルな構築物へと発展史観的な神社建築史などは、特に西洋人に理解されやすい神社建築の説明で、西洋人の美術史観・建築観であると指摘する。しかしながらこれら二人の論の細部の方は、西洋人には理解の難しい日本的ロジックも散見され、建築歴史記述の理念的な枠組みとして、二人は西洋のビジョンを無意識のうちに援用している事を指摘する。また、この西洋的枠組みと日本特有の概念

の混在が、現在の欧米人にとって日本人の手になる神社建築論の理解の難しい点の一つであるという。

第3章で、本論文は、現在の西洋のビジョンに依った日本の神社建築に対する新しい観点を提示する。幾つかの神社を訪れたときの詳細な観察記録を通して、本殿をはじめとする人工構築物と、自然石や樹木などの自然的要素との併存が形作る神社建築の姿を描き出してみせる。それは、申請者自身が日本に来て初めて気付くこととなった日本の神社建築の大きな特徴であり、また近年の日本における神社建築史研究の動向の中にも散見できる観点である。すなわち従来の日本における日本人建築研究者たちが、西洋的学問態度の影響の故に注目してこなかった要素に着目して捉えられた、神社建築のもう一つの本質的な姿を提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本独自の文化を純粹に保持して、極めて日本的な建築類型であると考えられている日本の神社建築について、その語られ方の中に存在する西洋的な視点を辿り、現在の神社建築理解においても日本的なものの方にも西洋的な視点が混在している事実を指摘するとともに、西洋人である申請者が、自らのもう一つの新しい西洋ビジョンにより神社建築の忘れられた本質的な姿を、人類学的に詳細な観察記述を通して描き出したものである。

明治期の西洋人による神社建築記述の持つ、極めて一方的な西洋的な興味の表現としての、つまり所謂<オリエンタリズム>の対象としての神社建築記述が、例えばラフカディオ・ハーン的情緒的景観描写に顕著に見られるように、西洋人に対してオリエンタリズムとして機能したのと同様に、日本人に対しても一定の神社イメージを植え付けた事が示唆され、興味深い指摘と受け取れる。また明治期の日本に定住して日本の神社建築についての西洋における古典的著作をもしたポンソンビー＝フェーンと言う人物の発掘は、日本人に対しての本論文の大きな貢献の一つに数えられる。

同様に、研究者も含めた我々日本人が定説と捉えている福山敏男・稲垣栄三によって構築された神社建築論が、西洋における発展史的美術様式観にしたがった論理構成を持っており、そうした西洋的枠組みと日本的な概念との齟齬が、日本人の手になる神社建築論を現在でも欧米人には理解しにくいものとしていると指摘する。この見解も、留学生ならではの、外からの視点に依って我々日本人が得た本論文の功績の一つだと言える。幾人かの現在の日本人研究者により進行中の、新しい方法論、新しい知見、新しい見方に依る福山・稲垣神社建築論の超克に寄与するものでもあろう。

本論文の最も重要な部分は第3章であり、申請者自身の現在の新しい西洋ビジョンに依った、神社建築についての新しい見方が披瀝され、今日的価値を有するもう一つの西洋的ビジョンに依る神社建築の見方が提示される。人類学的方法に依ったフィールドワークとして、徹底した観察・記録、そして解釈から、本殿をはじめとする人工構築物と、自然石や樹木などの自然的要素の併存が形作る神社建築の姿を描き出してみせる。

以上のように、本論文は、文献・資（史）料等の渉獵を含む基礎的な作業を経て、人類学的フィールド調査を実施し、独自の視点から新たな神社像を構築したものとして十分評価に足るものである。

なお本論文の一部は、以下の一編の査読付き単著論文(①)として既に公表されており、また、他の部分も以下の二編の査読付き単著論文(②③)として公表が確定している。

- ① Sahban Ilham, « *Jinja* 神社 », The 43th International Research Symposium, International Research Center for Japanese Studies, p.165-167, 2013/08/28.
- ② Ilham SAHBAN, « Sanctuaire shintô », *Pour un vocabulaire de la spatialité japonaise*, Éditions du Centre national de la recherche scientifique, 2014/04
- ③ Ilham SAHBAN, « Dualité du jinja : coexistence de la cabane et du rocher », *MESOLOGIQUES, Etudes des milieu humains*, 2013(Web journal).